

## 資料紹介

## 大西家蔵番外謡本 (四)

西 畑 実

## 細 谷 川

次第へ名にのミ聞し名所や、くく、日の入方を尋ん ワキ詞「是ハ一所不住の沙門にて候、我いまた中国の名所旧跡を見す候程に、唯今思ひ立吉備のほとりへと志し候 道行へ火宅ぞと火宅を出る哥枕、くく、かぞへくく明暮に都の空を跡に見て、吉備の中山なかくに、細谷川や二万の里、人も数そふ竹の坂、越て休ふ笠岡の里にもはやく着にけり、くく 詞「急候程に、是ハはや笠岡の里に着て候、此古道を分行、高麗の明神に参らハやと存候、是ハはや明神にて有けに候、浦輪のけしき波のあや、聞しよりもいやまさりて候、下へ山松の陰やうきみるなつの海、詞「や、是に由有け成庵の候、立寄休はやと思ひ候 レテ「なふく御僧、今の発句の口すきミ承んと、御跡したひて参りたり、扱も我國の風俗、和哥よりも敷嶋の道治まりし事なるに、御身此道の祖師とならん宗祇にてましますな

ワキ上カ、ルへ是ハふしきの御事かな、行衛もしらぬ老人の跡をしたひて夕浪の、月影清き言の葉の、祖師とハなとや勿駄なや シテ詞「いやさのミなくし給ひそ、此目前の有様を、発句に綴りて諸人の、迷ひをはらしたひ給ハ、上カ、ルへ其時我名を顯しつつ、神慮を委く語るへし ワキ上カ、ルへ此うへハとてうち詠め、山吹を心の色か郭公、詞「名をハ雲井に隠れなき、神と君との道すくに上カ、ルへ御名をなのりおはしませ シテ詞「実もく宗祇とハ、名に高嶋の空晴て ワキ上カ、ルへ夕はへ移る木隠れに シテ上へ我こそハ孝靈帝の皇子 上哥へ吉備津彦の大臣よ、くく、同へ重て爰に待給へ、夜遊の神楽奏せんと、かきけすやうに、失にけり くく ワキ上哥へ思へた衣かへうき旅の空、くく、片敷袖も短夜の、月諸友に草枕、有つる告を待て見ん くく 上地へふしきや俄に鳴動して、日月光か、やきて、山のはさくることくにて、顯れ給ふを辱き 釜殿神へ抑是ハ、吉備の中山にすんで、君をうやまひ国土を守

護し、吉凶をあらハす、釜殿の神とハ、我事也 後シテ上ハ荒面白  
 の気色やな、まかね吹、吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけき  
 と、よみしもかくやと思ふはかりの有様かな ワキ上カ、ルハ有難の  
 御事や、浦はの波もしつかなる、磯なれ松の木陰より、妙なる御声  
 の聞えさせ給ふぞや、たゝねかハくは和歌の道、みちひき給へ一筋  
 に、頼ミをかくる御注連繩 シテ詞「いや和哥三神も御照覧、二人下  
 ハ御身繼哥の祖師となり 下同ハ末世の衆生を道引給へ、実も迷ひ  
 の雲はれて、月日くまなき神道の、めくミを頼む人心 〳〵 クリ地  
 ハ夫二神出世の其昔、天の浮橋にて繼哥の御製、末代の衆生のた  
 め、是日の本の、奇特とかや サシハ又は日本武の尊の、同ハ珥  
 比麗利菟玖波塲須擬底、異玖用加祢菟流 シテ下ハ加威奈倍底、用  
 珥波虚々能用、同ハ比珥波菟塲伽塲とつき給ひしなり クセ下ハ実  
 や和哥のミち、言葉の色や人心の、情のミこそ命にて、ふかくや誰  
 か思ひ草の、花の色香もたへ成や、治る御代のもてあそひ、されハ  
 上の句ハ、天津神、下の句ハ、地津神の守護し給へハ、君も安全に  
 万民時をたのしみて、都鄙遠境の 君迄も、和哥の詠めにもれすし  
 て鬼神も感をなすとかや シテ上ハ東南西北に雲治り、同ハ風しつか  
 にて、万代迄もすへらきの正統もたへぬ我国や四海八嶋の外迄も  
 常盤の色や十かへりの、花咲ぬらじ松山の、梢をたかみ白雲やつも  
 らし頼もしの御国や シテ上ハ謹上 地ハ再拜 カガヲ シテ上ハわたり  
 り見む、かたこそなけれ久かたの、同ハあまの浮橋、かけそめしよ  
 り シテ下ハおもしろや、同ハおもしろや、時も実、春夏秋冬山海草  
 木国土治りて、花も盛に月も照そひ雪をさそひて白砂の、実道ひろ

き、神と君、けに道広き神ときみ、つきせぬ御代こそ、めてたけ  
 れ。

### 母衣

ワキ詞「是ハ越後の国の住人、五十嵐の小文次とハ我事也、扱も今度  
 下野の国の住人、奈須の与市宗高と蜂谷の蔵人国定と、日比の遺恨  
 により国定を討取候其科により某預り申て候、彼与市と申ハ、四国  
 八嶋にて扇的を射落し、其外数度の高名世に高き身の、引替たる  
 御有様痛敷存候、又某ハ男子一人持て候、当年十三歳に罷成候、今  
 日ハ最上吉日にて候程に、具足を着させ申さハやと存候、幸宗高  
 ハ文武にはまれ有人頼まハやと存候、いかに誰か有 トモ「御前に  
 候 ワキ「与市殿に御出あれと申候 トモ「畏て候 シテサシハ身ハ  
 はからざるに浅ましや斯埋木と成果て、明日をもしらすやしらま  
 弓、けふありとても化命、住はつまじき世の中に、何を頼ミに明暮  
 ん、荒定めなや候 トモ「や、与市殿の御声の聞え候、是にて申さ  
 うするにて候、いかに宗高殿ハ申候、小文次方より使に参じ候  
 シテ「扱只今ハ何の為の御使にて候ぞ トモ「さん候唯今参る事余の  
 儀にあらず、永々此所に御座候へ共、慰め申事もなく候程に御出あ  
 れとの御事にて候 シテ「近比悦入候、さらハ参らふするにて候  
 トモ「いかに申上候、与市どのを御供申て候 ワキ「此方ハ御出あれ  
 と申候ハ シテ「さらハかう参らふするにて候 ワキ「いかに与市殿  
 ハ申候、唯今申入候事余の義にあらず、最前も申入候ことく、永々  
 此所に御入候へ共、御慰めも申さす候間、其為御出あれと申候、又

某の一子亀若丸、今年十三歳に罷成候、具足を着せ申度存候、貴方の御事其譽れ天下に隠れなし、天晴御身にあやからせ度念願にて候程に、具足を着させて給り候へ。シテ「是ハ思ひもよらぬ事を承候物哉、某ハ日比の忠功も徒事となり、流罪の浮身と沈む身の、具足の親などハいまハしき事也、唯某をハ御免候へ。ワキ「定めて左様に御辞退有へきと存候去ながら、御身に對し科なき事、鎌倉殿御存候へ共、自余の心を宥ん為、只一たんの御とがめ、御心安く思し召れ候へ、御運御開き有へき事疑なし、何と御辞退候共、是非において頼入候。シテ「扱ハ何と辞退申共御ゆるしなく候や。ワキ「中々の事頼入候。シテ「さらハとも角も仰にしたかひ候へし、幸吉日にて候程に、此所にすなハち八幡宮を勧請申候へし、急て供物蓬萊御かざり候へ。ワキ「早とく其用意仕て候。シテ「一段の御事にて候、いかに亀若殿、上へ此方へ御出候へと、頓て床机に直し具足を着せ、高紐取つて引むすび、詞「我今かやうの身なれ共、若く盛成し時、君に忠を尽し戦場において、弓矢打物取つての勇力には某に御あやかり候へ、上へ又御果報ハ父御にあやからせ給へと、少し立のき打詠め、天晴武者ぶりのゆゑしに。上哥同ハ武士の矢なみにさける桜花、く、はなやか成し鑑きて、名をバ雲井にあけまきや。梓の真弓はるか成、人の国迄なひく世の、幾久しきも限らじや。く。ワキ詞「いかに与市殿、かゝる目出度折節、鑑又母衣の謂御物語候へ。シテクリハ夫漢の良長と聞えしハ、同ハ黄石公の兵術を伝へ、高祖皇帝の師範たり。サシハそのち項羽高祖の戦ひ七十余度に及ふといへとも謀を帷幄の中にめくらし勝事を

千里の外に顯ハせり是良長か智謀にあらずや。有時張良母に向ひて申様我戦場に望みつゝ謀をなす隙に後につゝ味方の勢服にさせる箭をぬきて敵を射る事ありいかハせんと申しに母是を聞付上衣を御て縫つゝけ簾の矢にかけしかハ八百萬の軍神母衣の縫目に移りつゝ將帥の名を輝かす夫より母衣とハ耀衣と書たり扱又母の衣と書しも今の謂なり。かくて度々の戦ひに其名をとめて漢の御代やをとせの皇基をたもたせ給ひ其身も麒麟閣に名をとめし二十八將の其中の第一將の公たり只是母衣の故なれやそのことく我も又一天に名をかゝやかし忠功第一の兵といさやいはれん。ワキ詞「いかに与市殿めてたふ一さし御舞候へと、上へ小文次やがて御酌に。シテ上へ立まふ龜のつばさの音。土地「雲井になびく、羽風の舞。マイ。土地「千年をふるや姫小松、く、よハひ久しき龜の、千本の松を、植なれば、千尋の竹の陰深く、翅をならふる友龜の、亀若万歳と舞納めつゝ、親子の契り尽せず榮ふる、弓矢の家こそ、久しけれ。

## 雪 女

次第ハ風のみと成玉丸雪、く、さむけき夕へ成らん。ワキ詞「是ハ都の西、嵯峨野のあたりに住居する、寂連と申法師にて候、扱も此程打続たる大雪にて、庭の竹雪に痛みて折損じ候、餘りに離儀に候へハ、人を頼み何とそかこひ申さハやと存候。シテ女「いかに寂連扱も此比の大雪に、庭の竹木折損じ難儀におほすらん、されハ草木心なしとハ申せ共嚙心うく思ふらん、何とそ方便をめくらされ、かこせ給ひ候ハ、少しハ風にも痛むまし、され共只一人の

御身なれハ、御心はかりにておはすへけれハ、我も力を添奉り、雪をかこひて参らすへし ワキ「実々御心さしハ去事なれ共、我ハ出家の事なれハ、女人の御身ハ頼れまし、扱々御身ハ何くの人そ シテ「我ハ此あたりの里に住者なるか、度々御庵室に参り、御経聴聞する者也、御庭前の竹木を痛ハリ歎き給ふ支、誠に出家の御心さし、下々荒有難の御事や ワキ「すハや次第に風あらく、雪氣に成て降来るそや、はや／＼帰らせ給ふへし シテ上「いやとよ雪ハふりくる共、竹のかこひの力を添て参らすへし ワキ「其時寂蓮あららかに、上々断しらぬ女人かな、はや疾出よと宜へハ シテ「いや出まじといふ内に ワキ「雪ハ次第に降積り シテ「前後も見えぬ雪の日に 上同「雪ならハ幾度袖を払ハまし、／＼、花のふゞきと詠じけん、むかしを思ふにも、実面白の雪の日や、鵝毛に似て、飛て散乱する人ハ、鶴筆をきて立ッて徘徊し給ふや、よしや帰れと宜ハ、早帰るべしさらハよ、又社参候ハめと、立出るとハ見えつるが、雪のふゞきに立紛れ、何くへ行も見へ分すあとしら雪と成にけり ワキ「扱も唯今の女ハ帰れといへハ腹悪く、奥がる声して行方を見失ひて候、いか様不思議の者にて候、重て来らぬ事ハ候まし、委尋ハやと存候 後シテ下「荒面白の雪の日やな ／＼、サシ「風はさうをひて灯きえ安く、月疎屋を穿て夢成かたし、雪の夜すから物すこきに、此山陰のけうときに、住とも誰か白雪の、ふり行暮を哀なる 下哥「兎にも角にも山賤の此身の果ハ浅ましや 上同「比しも秋の末、／＼、木々の梢もかれ／＼に紅葉の錦野も山も、光か／＼く其気色、千とせの秋の、夕へ哉 ワキカ、ル「雪寒ふしてね

られねハ、庭の呉竹雪に沈むを、打はらひ／＼、心を澄す折節に、まれバ有つる女也、いかなる人そ名をなれ シテ「是ハふり積雪の竹、世にふしき成者也と、只思召やらせ給へ ワキ「扱ハ現にミゆる人ハ、昔も角や姫の事、思ひ出る計也 シテ「それハ昔の賢き世に ワキ「其名も高き シテ「女とハ 上同「思ひなそらへ給ひそと、／＼、我ハ夢共現共、いき白雪のふるき世に、名ハ古へになり平の、片野の雪女あだにな思ひ給ひそよ クリ「夫非精草木といつは誠ハ無相真女の躰、一塵法界の心地の上に、雨露霜雪の、像を顯す サシ「然ればあた成世の中に 同「た／＼すむ水の淡雪の、消て跡なき現共 シテ「夢共よしと思ひしれ 同「蓮花露命の、仮の世なり ケセ「抑天のうるほに雨露霜雪の四つをみせ同しく雪月花の三つの徳をわかつにも雪こそことに勝れたれ先春ハ梅桜咲より散迄の雪を忘る／＼色ハなし夏ハ五月雨のふるやの軒端暮ながら庭ハくもらぬ卵の花のかきねや雪にまかふらん夜寒忘れて待月の山の端白き影迄もふらぬ雪かとうたかハれ冬野に残る菊迄もすハ初雪と面白きに山路のうさや忘るらん 上「雪の地ハ面白き雪の花、落花二度枝にきて詠もあかぬ夕へかな シテ上「夜ふる雪も静なる、白拍子思ひ出の、袖ふり返し諸共にいさや一指舞ふよ 上同「実珍敷舞の袖、きる白衣のかたの雪 シテ「夜も長々の裾をとり 上同「扇を開き シテ「声を上て、まふとかや マイ 上同「角て夜もはや更行ま／＼に、／＼、次第に雪は、山を越つへし青葉の木々も、白妙の、詠も興さめ心も埋る／＼されとも女ハすこしもたゆまず降つむ雪の、かかしとして、まふつうたふつさもうれしげなる有さまは、



こゝろもみたれて冷しや スサマ 上同やうく時も移り行は、く、御暇申て寂蓮法師、御弔ひの、功力にて罪も報ひも皆消果て、重き罪障の山高けれとも大悲の光に照され申せは消て残らぬ悪業煩悩今ハ菩提の道も明らかに、御暇申といひ捨て、出ると思へハ其儘に夜ハしらくくとぞ明にける

## 良 弁

ヲカシ「是ハ和州奈良の京金鐘寺開山良弁と申御方に仕へ奉る能力にて候抑此良弁と申奉るハ氏出所も知申さず唯天の降人とかや申候其子細ハ往昔義淵と申知識春日詣の御時深山の驚独の少児をつかみ来り高き木より落す則義淵拾ひ取五歳にして学問に入法相を明らめ其後花嚴を開く是日本花嚴弘通の根本にて候如何成御事にか一夏九旬の間南都にて花嚴を演説し又御身の上の因縁説法をも御のへ有へきとの御事に候間皆々参られ候へく 男次第青葉成共ハ重桜、く、奈良の都に急かん 男詞「是ハ山城の国愛宕の郡の者にて候、扱も南都に於て、良弁僧正と申知識、花嚴経を演説有由承候間、只今参詣仕候、や、何と申す跡より女物狂の来るが、面白ふ狂ふと申か、暫相待其者を見うするにて候 シテ一セイいかにあれ成重部共、奈良の京への道教よ、詞「何現なき物狂が可咲いとや、由諸なくてハ狂ハぬ物を、上カ、ルへ我ハもと近江の者、行末松の緑子を、空行鳥に誘ハれて、跡を慕て追鳥の上同へ尋し国ハ、とこくそ カケリ シテ下へ心つくしの船の上、同へ先九国には肥後肥前、大隅薩摩難面も、命ハ宕岐対馬、こかれ焦るる夕浪、

又有時ハ山道の、人も通ハぬさんせきに、鳥の啼を尋かね、莓の細道行なやむ、岩根に夜半を明し兼、短夜も、長門の国や稲葉山、丹後但馬の道とをく、親子の中もはや、切戸の名こそ悲しけれ 上へ国を尋て紀の路方、同へ和哥の浦風吹度到我ハ子故に片男波、帰らぬ中を悲敷、和泉河内を尋行住吉の神に祈りてハ、我子や何と難波瀾、足弱車くるくくと、四国西国残りなく、こや淀川の渡し守舟長も心あれや、身も何と檀の葉の、奈良の都に急くなり 男詞「いかに狂女、我々も奈良の都へ行者なり此方へ渡り候へ、扱何ゆへ南都を尋候シテ「子故に奈良へ参候 男「諸尋る子ハ南都に候かシテ「否其向後をしらぬ故かく現なく尋候 上カ、ルへ童ハ江州志賀の者、我子二歳の春の比、賤の仕業の野に出て、蚕に桑を摘し、折節鷺のおとし来て、西南へ連て行、余の事の悲しさに、飛行跡をしたひつ、中国九国四国路や、海山越て尋れ共、我子の向後更になし、荒我子恋しや候 男詞「実哀成物語、親子の契尽もせて、存命あらハ尋る子に、上カ、ルへなとかハ廻り逢さらん シテ詞「嬉しき人の詞かな去なから、親子ハ一世と聞時ハ、二度逢みん事優曇花の珍敷例にも、上カ、ルへ合せてたへやなむ阿弥陀仏 上同へ我國ハ神代より、直成、道を守りの、神国なれハよも我にさつからぬ子をバたぶへきや、我子たへ日の本の、あらゆる神に袖神楽、左右さ、く、太鼓鼓かね編木、岑の松風ハ琴の調、寺の鐘も声添て、しとるもとろに踏足も、手の舞も覺すし転てぞ、泣居たり 男詞「実哀成詞かな、ほとなふ南都に着て有ぞ、道終はなし、事共高札に印仕に立置かハ、此度花嚴の聴衆の中に、若も知への有

やせん此方へ来り候へ ヨカシ 「いかに申上候聴衆も群集致し候急御  
 出有て御説法を御始候へ ワキ 「既聴衆も袖を連ね説法の場群集せ  
 り、実や仮にも善人と居すれハ、蘭の庭に入かことし、久しからね  
 共異香身に有、仮にも悪人と居する事なかれ、魚籠のいちくらに入  
 がことし、久しからね共臭き事身にあり、上カ、ルへ我思ハすも驚  
 に取れ、鳥類の身と成へきを、善人の室に入、かたしけなくも此法  
 燈をかくぐる事、是偏に仏恩師恩報し難し、され共心に懸る事ハ、  
 生所をしらねハ父母なし、父母恩重經の文に背く、詞「や、此程辻  
 ムに高札をたて、驚に取れし子の親と印せし人は何人ぞ、我等も  
 驚の抓ミし子よ、聴衆の中に其人あらハ、疾々名乗出給へ シテ上  
 へ老てハ精神氣血淡薄にして、物にかん応する事すくなし、我こそ  
 其といはんとすれハ、身のおちふれと恥られて、心に物を思ひ草  
 ワキ上カ、ルへ色に出たる老女の白はせ、高札の主ハ狂女成か シテ詞  
 「中々なれや志賀の者、驚に取れて何ヶ年 シテ 今年三十余年な  
 り ワキ へけに我年も三十余、外の証拠ハ扨いかに シテ詞 「我子ハ  
 大悲の祈子にて、三寸一分の観音の像、其時ゑりに懸し也 ワキ  
 へ扉の文ハ シテ 百済氏 ワキ へ疑もなき シテ 親と子に 上同  
 へ二度廻り相竹の只世ハ命成けり 下キリ へ是に付ても九重の、奈  
 良の都の八重桜、枯ても花の咲へくハ、是観音の利生そと、いさミ  
 悦ひ諸共に仏果の縁を、仰くなり